

## 拉致監禁 痛哭と絶望を越えて No.1

### はじめに

2000年1月12日、新潟県柏崎市のS宅で、毛布にくるまった一人の女性（当時19歳）が保護された。この女性は、小学校4年の時の1990年11月13日の下校途中で拉致監禁され、自宅に連れ込まれていた。女性は、実に9年2カ月ぶりに家族と再会できたのである。この事件が発覚した時は、新聞テレビがセンセーショナルで報じており、記憶されている人も多いことだろう。犯人のSは、懲役14年の刑が言い渡されている。

この女性の恐怖と、解放された後もなお、リハビリの道は厳しいものと想像するのだが、統一教会信者で拉致監禁された経験を持つ美佐さんは、自身のホームページで、新潟事件に言及し、こう語っている。

〈新潟の監禁事件は「いつか親が助けに来てくれる」。そういった希望が（監禁中に）あっただけ（まだ）よかったと、羨ましくなり涙が溢れてくる。自分の監禁時のことを思い出すと監禁したのが親であり、兄弟も親戚もそれを容認していた。当然警察も助けてなどくれない。

一生ここから出られないという絶望感だけがあつた〉（米本和広著『我らの不快な隣人』より）

拉致監禁の悲惨は、ここにある。美佐さんは、監禁から解放されてすでに十数年経つが、依然として後遺症に苦しみ、薬を飲んでいる。

また、この美佐さんとは別に、拉致監禁された統一教会信者の心的外傷後ストレス障害（PTSD）の治療にあたった医師は、「臨床精神医学」2000年10月号で、被害者の「家族のしたことは忘れられません。親から籍を抜きたいと思います」という言葉を紹介。事件から随分と時間が経過した後も、親に対して、レイプした相手に対するような許せない感情を抱いているという。

親の存在なくして、私たちはこの世に存在できない。この親子の愛情の絆をズタズタに切断させてしまうのが拉致監禁である。ほとんどの拉致監禁被害者は、その後、親との関係修復に苦悩している。

このような信者の悲劇が再び繰り返されないように、教会は全力でこの問題と取り組んでいる。これまで、十分な対応が出来てこなかったことを責任者の一人として、信者の皆様に深くお詫びする。

拉致監禁の不安のない社会にしていくこと、後遺症に悩む人々に救済の手を差し伸べること、そして拉致監禁に加担した人々の法的道義的責任を徹底的に追及していくことをここに誓う。

編集した冊子は、拉致監禁の悲劇の深さと、そこから生還してきた人たちが、今も後遺症に苦しむ実態を広く知らしめるために作成したものであり、続けて発行していく。拉致監禁被害者のために祈っていただき、こうした事件が歴史の過去のものとなるように皆様の力をお借りしたい。

世界基督教統一神霊協会 広報局長 鴨野 守

2009年9月1日

## 拉致監禁による強制棄教事件の歴史

反対牧師が暗躍した43年間を概観すれば、4つの期間に区分できる。

第Ⅰ期が1966年～76年まで。この期間は、森山諭牧師が福音派の立場から「統一教会は異端」という動機をもって強制改宗を始めた。翌年7月7日、朝日新聞夕刊に「親泣かせ原理運動」の記事が掲載され、不安をあおられた親族が森山牧師に相談して事件が増える。76年3月4～6日、森山牧師が東京・八王子大学セミナーハウスで「統一協会問題対策セミナー」を開催し、監禁して説得する改宗法を他の牧師に伝授する。

第Ⅱ期が1976年～87年まで。この期間は森山牧師の他、船田武雄牧師、高澤守牧師、和賀真也牧師、村上密牧師などの福音派牧師が多数加わり、事件が増えた。

この時期、見逃せないのが日本共産党の動きである。共産党は日本赤化を目指してきたが、78年4月、統一教会の友好団体・国際勝共連合の活躍で、共産党は京都府知事選で敗北。これを受けて、宮本顕治委員長（当時）は「勝共連合との戦いは重大。大衆闘争、イデオロギー、国会、法律の各分野で…共同して、全面的な戦いにしていく必要がある。…勝共連合退治の先頭に立つことは、後世の歴史に記録される『聖なる戦い』」（「赤旗」78年6月8日号）と宣戦布告した。

これに呼応するかのように、同年11月3日、大学教授、ジャーナリスト、弁護士、牧師、国会議員らが連携し「原理運動を憂慮する会」を発足。その会を背景に、日本基督教団の浅見定雄氏、川崎経子牧師らが反対活動に乗り出した。

1978～86年、棄教目的で、信者を共産党系の精神病院に強制入院させる事件が多発した。しかし86年2月、被害を受けた信者が、民事裁判で勝訴し、精神病院を使った事件は終息。しかし、反対牧師と親族が結託して行う監禁形態をとる強制棄教事件は、警察も取り締まらないため続行され、年々事件が増加した。

第Ⅲ期は1987年～97年まで。「スパイ防止法制定」の動きに危機感を募らせた左翼陣営が、統一教会および国際勝共連合を壊滅に追い込もうと「靈感商法」キャンペーンを開始（87年2月14日、朝日新聞）。その報道で不安をあおられた親族が反対牧師に相談し事件が増加する。また、日本基督教団は88年3月、「統一教会問題を宣教課題に」（「キリスト新聞」同年4月9日号）の方針で、反統一教会活動に教団として取り組むことを決議（呼びかけ人は桑原重夫牧師）。以降、事件が激増する。93年3月の山崎浩子さんの失踪事件の頃には、年間300件を超える事件が起こる。

また、この期間、元信者が反対牧師や弁護士らと結束し、統一教会つぶしのための裁判「青春を返せ裁判」「婚姻無効裁判」を展開した。

第Ⅳ期は1997年～現在まで。強制棄教の暴挙を諫める者がだれもいない中で、97年、鳥取教会襲撃事件、路上での拉致事件、監禁された女性が自殺する事件など、悪質な事件が発生する。

鳥取教会を襲撃され、1年3か月間の長期の監禁被害に遭った富澤裕子さん、および路上拉致の被害に遭った今利理絵さんらが、牧師を相手に提訴。これを機に事件の件数が徐々に減少した。

富澤さんの民事裁判は、牧師も監禁事実を認め、勝訴。しかし、今利さんらの民事裁判は、牧

師が監禁事実を否認し、敗訴する（今利さんの裁判では、最高裁が親族に対し異例の和解勧告をし、和解）。事件は終息せず、その後も起こり続ける。

そうした中で、2008年2月10日、後藤徹氏が12年5か月の長期監禁から逃れてくる。現在、後藤氏は刑事の訴えを起こしている。

# 警察庁長官に訴えるも届かず

## 一夫と、当時1歳半の長女を拉致され、家族を引き裂かれたTさんの苦悩一

平成11年11月13日、都内に住むSさん（当時、32歳）が当時1歳半の長女と一緒に、埼玉県の実家に日帰りの予定で帰ったが、その後、半年経っても彼は自宅に戻るどころか、妻に電話ひとつかけてこなかった。

Sさんの「失踪」に、夫の実家が関与していることははっきりしている。Sさんの両親は、Sさん夫婦が統一教会の国際合同祝福式に参加し、結婚したことに強く反対していた。妻は婚約中、実家の敷居をまたぐことさえ許してもらえなかった。長女が生まれたことで、両親の態度は幾分和らいだが、それでも実家には上げてもらえなかったという。

平成11年10月半ば。Sさんが実家に教会が発行した冊子を送ったところ、母親から電話が入った。「小冊子を見たが、分からないところがある。今度、家にきて直接説明してくれないか」

少しでも、両親の理解を得たいと考えていたSさんは11月13日に行くと言った。その夜、夫が帰宅しないので妻のTさんは何度も、埼玉の実家に電話を入れる。だが、だれも受話器を取らない。妊娠中で体がきつかったため知人に頼み、車で実家まで乗せてもらった。前日は「家族全員がそろそろ」と言っていたのに家の雨戸まで締め切られていた。その日の夕刊も、ポストに入れられたまま。

深夜、夫の父親から電話が入った。「(Sと)話し合いの場を持っている」

Tさんは、夫の手帳に11月14日以降の仕事の予定がすでに書かれていることを指摘し、「話し合いは、夫が承知していたものではない」と反論する。

Tさんは動いた。15日には警察署を訪ね、夫と娘の「捜査願」を出した。職場にも連絡を入れ、何か動きがあれば教えてほしいと頼んだ。夫の父親にも、内容証明郵便を送付した。

「自分は妊娠六カ月で夫の助けなしで生活することは困難です。夫はストレスに弱く、神経が細かいため時折胸の痛みを訴え通院していた経緯もあり、こうした症状が再発する虞（おそれ）があります。娘は風邪をひき病院に通っています。一刻も早く、夫と娘を解放するように要請します」

夫と娘の衣類や薬、ぬいぐるみなどを実家に送った。実家にいつの間にか付けられた留守番電話にメッセージを吹き込んだ。「夫と娘を早く返してください！」

失踪から2週間後、義父から「この話し合いは簡単には終わらない」という速達が届く。どこにいて、いつ帰れるのか。Tさんが知りたいことは何も書かれてはいなかった。

そのころのTさんの精神状態は、どんなものだったのだろうか。

「言葉では言えない、言葉にはならないものだった」とTさん。電車に乗ると、この電車で夫と娘が実家に帰ったのか、と思い、自然に涙があふれた。長女を思い出すので、小さな子供の姿を見ることさえできなかった。

夫と娘が拉致されて40日が過ぎ、街はクリスマスの賑やかなムードに満ちていた。しかし、Tさんの心は沈んでいて、手紙を書けば、それはいつの間にか“遺書”になってしまった。

今も破らずに残している手紙がある。

夫に宛てた手紙。「Sさんと娘のいない生活なんて考えられません。もう耐えられません。これ

以上生きていたらあなたのご両親を恨まなくてはなりません。だから……私の存在がなくなればSさんの責任も軽くなるし、ごめんなさい。

家の中にいれどこを見まわしてもSさんと娘の影があって苦しくて涙が止まりません。娘が大きくなって物事がいろいろわかるようになったら、私のこと話してあげてください。

Sさん、愛しています。でも、ごめんなさい。体に気をつけて生きてくださいね。あなたとちょっと一緒にいたかった……でもそれができないのなら……短い間でもあなたの妻でいられたこと幸福に思います」

娘に書いた手紙。「ごめんね、本当はあなたの成長を見届けたかった、あなたの産声を聞いた時、感動で涙があふれたことを昨日のこのように覚えています。首がすわり、ハイハイをし、つかまり立ちができ、初めて歩いたあなたの姿は本当に可愛くて言葉に表すことのできないものでした。

保育園でもいろいろな先生に愛され、おかあさんの自慢でした。迎えに行くと飛んで来ておかあさんと一緒に階段を下りました、あなたの手のぬくもりを今でも覚えています。でもまさか、あなたのおじいちゃん、おばあちゃんの手によって引き離されるとは思ってもみませんでした。

おかあさんは、お父さんやあなたなしではとても生きていけません。頑張ってきたけれどももう限界です。おかあさんを許してね。もっともっとあなたをいろいろな所に連れて行ってあげたかった、いろいろな話をしてあげたかった。(略)どうかお母さんの分まで力強く生きてください。そして、お父さんを支えてあげてください。あなたに出会えて幸せでした。どうもありがとう」

何度も、「死」を決意しながらも実行しなかったのは、Tさんのお腹に宿っていた小さな生命だった。「私は生きているんだ」という元気なメッセージを送ってくれたので、辛うじて踏みとどまることができました」

Tさんは平成12年に入って、浦和地裁に夫の両親に対して娘を引き渡すように求める仮処分申請を申し立てたが、相手方が裁判所に現れなかった。田中警察庁長官（当時）宛てに上申書を送ったりもしたが、事態の進展を見ることはできなかった。

それでも長女との生活が諦められず、Sさんの両親に対して婚姻妨害と長女に対する親権侵害で、損害賠償を求める民事裁判を東京地裁に起こした。夫は最初、仮処分申請時と同様に姿を見せなかった。だが、再度申請すると平成12年8月ごろ、弁護士の山口広氏とともに二人で東京地裁に現れた。夫の失踪後に顔を合わせたのは、このときが初めてだった。

ただ、夫のSさんの様子は変だった。明らかに山口氏を意識した行動をとるときもあった。裁判所の一室で二人きりの話し合いをしていると、小さい声でも十分聞こえる場所にもかかわらず、外にいる山口に聞こえるように、怒鳴るような大声で迫ってくるときがあった。

さらに、話が二転三転して、前回会った時とは違う内容になることもしばしば。ちょっとした質問でもすぐには答えを出さず、次回会うときまで弁護士らと話し合ったと思われる節も。

また、Sさんが献金した分を返金するよう教会に求めてきたときも、山口氏の影を感じた。返金の振り込みを指定した口座は、山口氏の弁護士事務所の口座だったのだ。

やがて、強制棄教させられたSさんから離婚の申し出があり、Tさんは異議を唱えたが、認められなかった。

月に一回の相互面会だけは取り付け、SさんとTさん、長女、次女が会う時間は持てた。しかし、相手は法律のプロである弁護士。Tさんは、全くの素人。

Tさんが一番失敗したと思ったことは、調停で取り決められた文面の中に、相互面会は「子供

の成長に配慮して」という言葉が入れられていた点だ。

面会のある時、長女が誰かに言わされているような様子で、「会いたくない」と言ってきた。この一言を盾にとって、相手の方が「面会は、子供の成長の妨げになる」として、長女とは会えなくなってしまったのである。

夫の突然の失踪からすでに10年の歳月が流れた。

夫と長女がいない失意の中で出産した次女は9歳。人見知りが激しかった。小学一年から、教会の合唱団に入った。初めての音楽教室の発表会では母親から離れず、舞台のピアノの陰に母子で並んだほど。それが今では、人前でも堂々と歌う。子供が、鮮鶴合唱団に所属しており、神性に満ちた美しい表情で、清らかな歌声を聞くとき、Tさんは言いしれぬ感動に満たされる。

だから、「この子が成長し、祝福を受けて貰えるよう頑張らねば」と自分を励ますTさん。母子家庭ゆえに、経済的に楽ではない。だが、彼女の悲しみは別にある。

筆者が「どんな時が辛いですか」と問うと、Tさんはこう答えた。

「いつの時も辛いです。子供にとって生まれた、いえ生まれる前から父親はそばにいないので家の中に父親がないことに違和感はないようです。また、それが辛いです。

先日、教会に向かう途中『お母さん、赤ちゃんがほしいね。弟が欲しいよ。産んで!』と言われ、答えに困ってしまいました。これから、いろいろな事がわかってくるに従ってどのように伝えるべきか悩みます」

Tさんは今も、夫の姓で通している。

「いつの日か、彼と長女が帰っていると信じているからです。引き裂かれた家族が再び、一緒に過ごす日が来ることが私の夢であり、希望なのです」(Tさん)

# 残された心の傷

塩谷知子

塩谷知子と申します。私は1992年8月25日、韓国ソウルで挙行された「3万双国際合同祝福結婚式」で結婚し、その後、家庭をもち、現在3人の子供がおります。

私は2006年8月、鬱（うつ）病になりました。子育ても家事もできなくなり、真っ暗なトンネルに入ったような心境を味わいました。「この思いは……、どこかで味わったことがある……」

13年前に体験した拉致監禁を思い出したのです。

私は忘れようとしてきた過去にようやく向き合い始めました。そして、その事を通して拉致監禁を体験した私だけでなく、当時婚約者であった主人も大きな心の傷を受けていたことが見えてきたのです。私の体験を報告します。

## ◆監禁開始

1993年12月23日、私は家族から散髪を頼まれ、実家に帰ったときに拉致されました。拉致された後、私は京都のマンションに69日間監禁され、さらに、日本イエス・キリスト教団・京都聖徒教会内に軟禁中の38日目に、何とか逃げることができました。

両親は、最初親族の紹介で、八尾ルーテル教会に相談に行き、そこで聖書の勉強をすすめられ、洗礼を受けたそうです。両親は、その八尾ルーテル教会で京都聖徒教会の船田武雄牧師を紹介されたのです。船田牧師の「相談会」に参加するようになった両親は、そこで船田牧師から指導を受け、拉致監禁を計画するようになったと言います。

また、母の従兄弟で、日本基督教団に所属し、当時、台湾宣教師であった二ノ宮一朗氏も、京都のマンションの中に2週間ほど一緒にいました。

拉致された日のことです。家族の散髪を終えて帰ろうとすると、両親は「駅まで送るから」と言って一緒に家を出ました。数分歩いた路上で、私は、突然サングラスをかけた数人の男女に取り囲まれたのです。

突然のことで何が起こったのかわからず、私は恐怖心で大声をあげ、助けを求めました。しかし、どうすることもできず、そのまま強引に、車に押し込められてしまったのです。

私が押し込まれた車の前には、別の車が1台、さらに後ろにも1台あり、トランシーバーで連絡を取り合いながら走り出しました。見ると、私が乗せられた車の運転席には、親戚の叔父、助手席には父がいたのです。妹と母は、私の腕をしっかり握っていました。

そして、そのまま京都のマンションまで連れて行かれました。車から降りても、私が逃げないように、家族は私の腕をしっかりつかみ、エレベーターの中では、何階で降りるのかさえ見せてくれませんでした。マンションの一室に入れられると、親は玄関ドアに鍵とチェーンをかけ、そのチェーンに、さらに南京錠をかけて、私の靴もどこかに隠してしまったのです。

私は、家族がこのようなことをしたことにショックを受け、あまりの悔しさで、正常な気持ちでいることができませんでした。こうして、わたしの監禁生活が始まったのでした。

## ◆監禁されたマンションの中で

パニックになっている私に対し、両親は「知子すまん。これしか方法がなかったんや」と何度も言いました。私は、「こんなことして良心が痛むでしょう！」と言いました。

部屋は、嚴重に鍵がかけられており、トイレに行くときも父が見張っていました。

無理矢理連れて来られた時のショックは、体が覚えており、異常なほどの恐怖心と、寝るときにも私が逃げないよう、家族が常時見張っていましたので、強い精神的圧迫を受け、苦痛を感じる日々が始まりました。

両親は、「話し合いをしたい」、「統一教会のことを知りたい」、「統一教会に詳しい牧師の話聞いてほしい」などと言って、私に詰め寄ってきました。しかし、いくら話しをしても平行線でした。

結局、「話し合い」というのは建て前であり、それは、何が何でも統一教会の信仰を捨てさせようとする一方的なやり方でした。私は「とにかく逃げるしかない」と思い、3日目の明け方4時頃、ベランダの窓の鍵をあけて外にでました。見ると、そこは8階でした。下に降りることさえもできず、やむを得ず、私は2軒先の家まで塀を飛び越えて渡り、朝、その家の人起きてきたら助けてもらおうと思いました。

ところが、両親に見つかってしまって、どうすることもできず部屋に戻りました。

それから数日後、元信者の女性や、船田牧師が訪ねてくるようになりました。最初は、統一教会関係の本をたくさんもってきて、『原理講論』の間違いなどを話して帰りました。

私はいったいどうすればいいのかわからず、神様にただ祈るばかりでした。一方的に批判を聞かされる私は、端的に言えば、笑えばいいのか？泣けばいいのか？ また、親の前で、牧師の前で、反論してもいいのか？ 彼らにどのように接すればいいのかさえも分からず、ずっと悩んでいました。なぜならば、私が何を言っても、彼らはそれを受け入れてくれなかったからです。特に、船田牧師はそうでした。船田牧師は、統一教会の信仰を持つ人に対して、「狂った者」「きちがい」としか思っていないでした。

そんな日々を過ごしていたある日、母のレポート用紙の中から、今回の監禁にあたっての綿密な計画が書いてある紙を見つけました。そこに、私をどのようにマンションに連れていくのか、マンションの中での生活内容、注意事項、親がとるべき姿勢、お風呂には2人で入るなど、細かい指導が書き込まれており、さらには、私が「脱会届け」を出したあとで、リハビリの生活が必要であることまで、さまざまなことが書かれてあったのです。両親が牧師の指導を受け、その指導に全面的に従っているのがわかる内容でした。それを見たとき、私はさらにショックを受け、「もうだれも信用はしてはいけない」と固く心に決めたのです。

そして、その計画書の内容で、私が脱会を決意するまでは、どんなことがあってもここから出してもらえないということを、再認識させられました。

船田牧師は、私が監禁されてから2週間ぐらいまで、ほぼ毎日、マンションに訪ねてきました。その中で、統一原理の内容と従来のキリスト教の聖書解釈との違いを比較して批判し、さらには、文鮮明師の路程についても批判し、私の信仰すべてを否定してきました。私は心の中で、「人が神様から受けた啓示に対して、どうして他人がそれを嘘だと言い切れるのか？ その根拠がどこにあるのか」と思いました。それは、本人と神様との間でしかわからない出来事であるはずなのに、それを、あたかも文師が嘘をついているように牧師は決めつけるのです。

そんな牧師の姿を見て、「うそをつかせてここに、連れてこさせたのはだれだ！ それを指導したのは、あなたではないか！」と感じて、その矛盾に満ちた牧師の姿勢に対し、私は到底受け入れることができませんでした。

しかし、ここから出ようと思えば、「偽装脱会するしかない」と思い、私は何一つ反抗せず、ただただ忍耐し続ける日々を続けざるを得ませんでした。なぜなら、私のマンションの中での生活態度が、いつも両親から牧師に報告されていたからです。

私は、本当にくやしくて、くやしくて、その思いをどこにもぶつけることができず、布団を何度も噛んで泣きました。

## ◆偽装脱会

監禁から解放されるために、「今日こそ、統一教会をやめると言おう」「今日こそは……」と、毎日そう思いながら、なかなか言い出す勇気ができませんでした。

「本当に偽装脱会ができるだろうか……。また、言ったとしても、私がお後、統一教会に戻ったら、親は悲しんでしまうだろう……。そう思うとなかなか決意ができませんでした。

ちょうど40日が経った朝方、夢をみました。真のお母様が真っ赤なチマチョゴリを着て大きなおなかをされ、しんどそうに座っておられました。そして、その隣に真のお父様がおられ、「今回は難産なんだ」とおっしゃったのです。

私が監禁された当時は、1600名の修練会が始まったときで、日本は世界を生かすエバ国家としての重要な使命の真っ只中にいるときでした。私も決意し、乗り越えなければならないと思われされたのです。

その日の夜、元信者の姉妹が訪ねてきて、「今どんな気持ちですか？」と私に尋ねてきました。「今、言わなければならない……。私は必死の思いで、ようやく「統一教会の信仰というものから離れたい」と言ったのです。

しかし、「脱会宣言すれば、次はどうなっていくんだろう……。心の中は不安でいっぱいでした。自分の本当の気持ちを誰にも打ち明けることはできず、心が不安定になっている私に対し、船田牧師は、真のお父様を中傷した反対派のさまざまな批判書を持ってくるようになりました。

私の心は揺れ動き、どれほど神様に祈ったかわかりません。神様の願う真実な道を歩みたいと願う中で、神様はなぜ、こんなにまで、家族や私を苦しめるのか、とも考えました。

そして、寝ながら布団のなかで、「神様あなたの前に真実に生きた方はどなたですか？あなたのために、もっとも涙を流された方はどなたですか？」と、私は、まるで神様を試すようにして、真剣に尋ねました。

すると、その夜、再び夢をみました。それは、真のお父様の背中を私が流している夢でした。その背中は拷問を受け、傷だらけになっている背中でした。

迫害の中でお父様がどんな屈辱と痛みを越えてこられたのだろうか……。お父様は地獄の底にいらっしやっただ……。マンションの中は、たった一人の孤独な戦いでしたが、信仰の幼い私に対して、神様は勇気と知恵を与え、夢を通して守ってくださったのです。

「根気強く、忍耐してがんばるんだよ」とお父様がいつも励ましてくださっているように思えました。そして、たくさんの兄弟姉妹が夢に現れて、私のために祈ってくれていることを実感し、とても感謝しました。

私ひとりの力では、とっくに倒れて、いろいろ考える気力さえも失い、今頃はどうなっていたらと思うます。

私が祝福を受けていること、そして、自分の気持ちをほとんど口に出して言わないことなどから、船田牧師たちは、とても私を警戒している様子でした。

両親は、監禁生活2ヶ月を過ぎると、イライラし始め、母は「もう帰りたい」と何度も泣いたりしていました。その姿を見て、父が「何を泣いてるんや！この問題で今も泣いている親がいっぱいいるんや！」と母に強く言いかけました。すると母は、「わかってる！知子が統一教会の間違いがわかるまで、死んでもここを出ない」と決意し直すのでした。

そのような両親の姿を見たとき、牧師から一方的な情報を刷り込まれ、精神的苦痛を負いながらも、「娘のために！」とあって、何も分からずに懸命に行動している姿があまりにもかわいそうに思え、それと同時に、牧師に対する怒りを抑えることができませんでした。

マンションの中は地獄でした。そのころ、私は心身共に限界状態に達していました。親子なのに両親を、姉妹なのに妹を、全く信じることができず、本音で話ができないという、いつも緊張した状態の中にあって、気がどうにかなってしまいそうでした。

ついに私は、吐き気や頭痛、指先にしびれが出てきて、心身共に傷つき果ててしまいました。外の空気を全く吸うこともできず、食欲も、体力もなくなり、監禁前に46kgあった体重は40kgにまで落ち、急激に痩せてしまいました。14年たった今も、体重がもとに戻りません。

母から、「（京都聖徒）教会の人が、知子さんは何を考えているかよく分からないと言っているから、自分の気持ちをはっきり言いなさい」と要求されましたが、もし自分の気持ちを正直に話せば、永遠に続くであろう「監禁生活」。そこから逃れるため、私は統一教会をやめたふりをする「偽装脱会」の手段を選ばざるを得ませんでした。そして、船田牧師から許可を得て、ようやく69日目にマンションを出ることができたのです。

牧師は、マンションにいる間、「統一教会は一方的な教え込みをしており、洗脳だ」と批判し、「文鮮明が『人を殺せ！』と命令すれば、平気で人を殺してしまうような恐ろしいテロ集団だ」とも言っていました。

しかし、牧師の方こそ、両親や親戚に一方的に情報を流し込み、統一教会への憎しみの思いを刷り込んで倍増させ、本心では”こんなことしたくない”と思っている両親に対して、「そうすることが子供のためであり、そうするしか方法がない」と指導し、拉致監禁という犯罪行為を行わせているのです。子供を心配する親の心理を利用し、不安を煽るやり方は問題です。また、私の「信教の自由」という基本的人権を配慮しようとする気持ちが一切ありませんでした。

このように、私たち家族がマンションで苦しみ続けている間、実は、主人の方も大変な苦しみを受けていたのです。

主人は、私の母から「親子の話し合いをします」という1通の手紙を一方的に受け取り、それを読みました。突然、私の居場所さえも分からない状況になりました。主人（当時、婚約中）はとても苦しみ、そして、心に深い傷を負ったのです。

## ◆京都聖徒教会での軟禁生活

マンションを出てから後、私は、牧師が「リハビリ」と称している生活をするために、京都聖徒教会へ行くことになりました。そこでの生活は軟禁状態でした。

船田牧師の言い分によると、「脱会すると、今まで真実だと思っていたものが完全に否定され、絶望感に陥っており、それが深い心の傷となる。だから、統一原理の間違いをしっかり理解していなければ、普通の生活ができなくなる。社会復帰もできない。そのために正しい真理、聖書の教えを学ばなければならない」と述べ、京都聖徒教会に泊り込みの「リハビリ生活」をしなければならないということでした。

船田牧師は、「信仰は自由だから強制はしない」と語る反面、「(キリスト教を)信仰していただろう」と言ってきました。強制改宗をしている牧師が、こんな矛盾したことを言っていることに対し、私は「ここには真理はないし、本当に自分が探しているものはない」と感じました。

マンションを出るとき、家族は本当に疲れきった状態でした。それでも父は、母と私がマンションを出る3日前にそこを出て、仕事に行き始めました。

京都聖徒教会での軟禁生活は、私以外にリハビリ中の方が5人、元信者で「保護説得」と称して監禁場所に赴き脱会説得をして、献身的に活動している人が3人、そしてクリスチャンの奉仕者の女性が一人いました。それ以外にも、船田牧師の家族も暮らしていました。

牧師の家庭以外は、みんなで一緒になって寝泊まりしました。食事も、食材を自分たちで買いにいったって作って食べるのです。

リハビリ生活の1日目は、母と妹も一緒に寝泊まりしました。しかし、妹は「こんな団体生活は、自分にはできない」と言って、翌日帰り、結局、私と母だけが残りました。

そこでの生活は、朝6時から早天(聖書の学び)があり、その日によってさまざまですが、祈祷会、聖書の勉強会、伝道集会、賛美集会、家庭集会、日曜日には礼拝と、午後1時から統一教会問題の相談会、月半ばからは、統一教会問題の対策集会に出掛けます。

参加することに対し、強制はされませんが、基本的には「参加するようにしてください」と言われました。

母は、私がトイレに行くときも、洗面に行くときも、ずっと付き添ってきました。しかし母には「娘を信じたい」という思いがあり、そのような監視生活をするのが苦痛だった様子でした。

寝るときは、ドアの近くに元信者の人たちが寝て、私に対しては「逃げるのではないか?」という警戒心からなのか、一番ドアから遠いところで寝るように言いました。

ある時、母が泣いているのを見つけました。私が「どうしたの?」と聞くと、「もう少し子供さんのことを考えて行動してください」と教会の人から言われたとのことで、母は母なりに懸命に努力しているのに、そのように言われたことが、とてもつらかった様子でした。

リハビリ生活に入ってから1週間後、私は「脱会届」を書くように言われました。脱会届を書くときは、すでに船田牧師のもとで脱会した人たちが書いた「脱会届」のコピーを見せられ、「このように書いたら良い」という指導を受けました。そのときの私は、牧師たちの信頼を得ることによってしか外に出ることができない状況でした。

「脱会届」を書いた後、私は母に「パーマをかけに行きたい」と言って一緒に外を歩きました。母と一緒にないと外に出ることは許されませんでした。外を歩くことができたときに、「忍耐

すれば必ず道は開かれる」と思え、まるで冬を越えて春を迎えてゆくかのような、希望を感じることができました。

私がリハビリの生活をしているときに、主人が友人と共に、京都聖徒教会を訪ねてきてくれたことを、後から聞いて知りました。

そのとき主人は、「知子さんは、今は会いたくないと言っています」と言われ、追い帰されたそうです。主人は、東京からわざわざ私を捜して訪ねてきてくれたのですが、私に会うこともできず、追い返されたのです。そして私は、彼が訪ねてきたことすらも全く知らされなかったのです。

リハビリ生活が始まってから、20日が過ぎた頃、母は少しずつ体調を崩し始め、その様子を見た京都聖徒教会の人が、「知子さんもしっかりしてきたので大丈夫でしょう」と言われ、母は自宅へ帰っていきました。

母と一緒にいる期間は、お風呂は船田牧師の家のお風呂に入り、洗濯は、母が外のコインランドリーでしてくるような状況でした。しかし、母が家に帰ってからは、状況が変わりました。私が一人で外出することは許可されませんでした。だれかと一緒ならば銭湯や、コインランドリーに出かけられるようになったのです。

## ◆苦悩…、そして脱出

そんな中で、私は、両親や妹が犠牲になり、私のためを思って行動してくれたことを思うと、どうしても、もう一度統一教会に帰る気持ちになれなくなって、「私は隠れキリシタンのようにしているしかないのか…」など、本当に頭の中がおかしくなりそうなくらい考えました。冷静に物事を判断する力などなかったのだらうと思います。

しかし、「統一教会の教えを通して救いを感じていたことは、否定することができない」「主人はどんなに苦しんでいるだろうか……」と思うと、混沌とした状態が続いて、「いったい私の人生は、誰のものなんだ！」と大声で叫びたい心境でした。本当に苦しい日々が続きました。

自分自身の本心では、「自分の気持ちに正直に生きたい！」という思いでいっぱいだったのです。

牧師たちは、「もう大丈夫だろう」と私を信頼している様子で、拉致監禁されている兄弟の所へ一度一緒に訪問したり、これから拉致する予定の親や親族の方々が教会へ相談に来ているとき、「あなたの体験したことを話してあげて欲しい」と言われ、話をしたりしました。しかし、そうする中で、自分の本心を偽り、願ってもいない行動をしていることがたまらなく苦しく、「やはり、ここを出なければ自分という存在が自分でなくなってしまう」と思いました。

毎日、どうすべきかを、ただひたすら祈りました。

そんなある日、京都聖徒教会の壁に聖句を見つけました。

イザヤ書41章13節

あなたの神、主なるわたしはあなたの右の手をとってあなたに言う、

「恐れてはならない、わたしはあなたを助ける」

神様の声だ！と確信し、涙があふれました。

私は自分の心を偽らず、正直に生きたい。

宗教間の争いの犠牲になりたくない。

そう思い、神様の導きを信じて脱走することを心に決めました。

リハビリ生活から38日目、拉致されてから107日目に、私は束縛された異常な環境からようやく逃げたのです。

## ◆残された心の傷

私が逃げてからは、両親とは、ほとんど手紙だけのやりとりで3年間会うことは、ありませんでした。

逃げて来たときは、統一教会の活動には戻らず、私を助けてくださったご家庭にお世話になりながら、少しずつ心が癒されていく日々を過ごしました。

そして、私と主人は、そんな中で家庭を出発できたことを神様に感謝しました。

純粹だった主人は、私が拉致されて以来、とても人間不信に陥り、人と会うことを嫌うようになりました。

主人の両親は、私たちの結婚を喜び、結婚式も考えてくださっていたそうです。しかし、私の両親が拉致の話を主人の両親にも持ちかけていたために、それも実現することなく、隠れるように2人の生活がはじまったのです。

主人は、私の両親をとて恨みました。この拉致監禁によって、どれほど心を踏みにじられたことかわかりません。

私が少しでも両親の話をすれば、急に主人の顔の形相が変わって、イライラし始め、どこにも持って行き場の無い思いを私にぶつけてきました。夜は熟睡できず、毎晩うなされ、そしてとうとう主人は、自分にはどうすることもできない恨みと悲しみをかかえて、鬱（うつ）病になってしまったのです。働くこともできず、働いてもすぐにやめてしまう。そんな自分を責め続け、苦しんだのです。

6年間、あり地獄に入ったような日々が続きました。

そして、とうとう2006年の夏、私も、鬱（うつ）病になってしまったのです。

主人は、今でも拉致のときの話をすると、怒りがこみ上げてきて、形相が変わります。過去がフラッシュバックしてよみがえり、解けない恨みが湧いてくるのです。

拉致監禁を直接されなかったとしても、このように、周りの家族も苦しみ、深く傷を負います。そして15年以上を経た今でも、まだその傷は癒えていないのです。

私は長い間十分に主人の痛みを理解することができず、私を責める主人を、私も責め続けました。しかし、自分が鬱病になり、その苦しみと、拉致されたときの苦しみが重なって、主人の気持ちをもう一度考えさせられました。

もちろんわたしが彼を怒らせたことも何度もあります。しかし、主人は私に対して「あなたに対する怒りは、自分の腹の底にあるあなたの親に侮辱された恨みが、それをさらに大きくさせる」と言いました。

それを聞いたとき、私と親だけの問題ではない深刻さを感じ、まだまだ我が家庭は、この拉致監禁問題について解決していないことを改めて実感したのです。

私も自分の無力さに落ち込み、生きている値打ちも無いもののような気持ちになることがあります。ただ自分が探し求めているものを求め続け、近くの家庭教会につながって、今はひっそりと信仰を持っています。

3人の子供たちに恵まれて、子供だけは神様中心に育てたいと夫婦で願っています。

反対牧師たちは、統一教会の信仰を完全に失くしてしまうまでは、自由を奪います。親の子供を思う気持ちを利用し、「保護説得」という美しい言葉を使いますが、それは完全に拉致監禁であり、本人の自由意志を全く無視して、「気が狂った者」のように扱い、最も信頼したい親から子供は拉致監禁されるのですから、本当に心に負う傷は深いのです。

信教の自由を奪い、親子関係に傷をつけて、それを修復していくことに、どれほど時間と、気力があることかわかりません。このような行為は、人格を破壊し、精神も身体も脅かす許されない行為であると実感しました。

そして、私の主人のように直接拉致されなかったとしても、身近な人がその問題で大きな衝撃的なショックを受けることで、精神的疾患を生み出しているのです。

独善的な「正義感」をもち、罪悪感もなしに拉致監禁をし続ける反対牧師たちがいることは、絶対に許し難いことです。

私の体験は、氷山の一角で、もっともっとたいへんな方々がいることと思います。

これからも、この拉致監禁問題の解決のために声を上げていきたいと思っています。

## 逆境を越えて得た親子の絆

大森陽子

私は20歳で教会に導かれて御言を学び、24歳で献身的に歩むようになりました。1988年10月30日、6500双の祝福結婚式があり、25歳でその祝福式に参加した約1年半後の1990年5月、拉致監禁されました。

以前、御旨を共に歩んでいた、私と同県出身の姉妹が拉致監禁され、その姉妹が離教したあとに母の職場に訪ねたらしく、「統一教会は大変なところである。陽子さんを救い出すために協力したい」と語り、反対牧師を紹介したそうです。

それから2年間、私の両親は反対牧師によって教育を受け、拉致監禁のための準備をしていくことになりました。

私が献身的に歩むようになった年、父方の祖母が亡くなりました。父は、「一度、墓参りに来てほしい。そうしてくれれば信仰も認めるし、自分の好きな道を自由に歩んでいい」と言うのです。私も今までお世話になった祖母のお墓に行って、一度は手を合わせたいと思っていましたので、「監禁されるのでは」という不安が少しありましたが、1泊2日の予定で帰省することにしました。1日目は何事もなく無事に終わりましたが、2日目の朝6時頃、親戚からの電話を受けた父が、1階でヒソヒソと話しをしているのを2階の部屋で聞きながら、不審に思いました。その日、帰る前にお墓参りをしてから、本家へ挨拶に行くはずでしたが、父の車はお墓の方向と違い、父の姉の家に向かっていくのです。

伯母の家に着いたとき、そこに親戚がたくさん集まっており、父が「今から話し合いをする。これからお互いが理解できるまで徹底的に話し合う。それが解決するまで出さない」と言い、監禁が始まったのです。そのとき、父の目が蛇の目変わったのをよく覚えています。

「父の背後にサタンがいる！」と確信した瞬間でした。この監禁で一番私が恐れていたのは、反対牧師や親以上に、自分自身の心でした。これから私がどれくらいこの道を信じているのか、試されていくのだと思ったからです。

監禁1日目にして、すぐに苦しくなってきました。自分を守るものが何もない中での戦い、条件もない中で、相手の土俵で闘っていくことのむずかしさ、反対牧師に勝つためには、神様から知恵をいただきながら闘うしか道はないと思いました。

5～7日ぐらいたった時でしょうか。佐賀唐津聖徒教会の中村勝彦牧師と、熊本の希望ヶ丘教会の本田勝宏牧師が来ました。その二人を見た瞬間、頭に血がのぼって、持っていた本を二人目掛けてぶつけました。すると二人が「私たちの話を聞くつもりではなかったのか。聞くと約束したのではなかったのか」と言うので、「私はそんな約束はしていない。この話し合いは親子の問題だから親子でやります。あなたたちには何の関係もない」と反論しました。すると、中村牧師が私の態度を見てとても怒り、「お宅の娘さんは、まったく聞く耳をもっていない。もう少し親子の信頼関係を取り戻して何でも言うことを聞くようになってから私を呼んで下さい。そうなったら私たちは教育に来ます」と言い残して帰って行きました。

その後、私が幼い頃育った場所、母の実家（お寺）に移したほうが私の心がひらくのではないかということで監禁場所が母の実家になりました。本堂の裏に小さな部屋が2つあり、その一つ

の部屋で生活するように、準備されていました。裏部屋なのでとても天井が低く、中にはポータブルトイレ、布団、机が準備されており、食事も顔を洗うのも、すべてそこでできるようになっていました。寺の監禁では、鹿児島<sup>1</sup>の日本基督教団、布田秀治牧師がよくたずねてきました。

窓は二重になっており、サッシと障子になっていましたが、障子にすべて大きい釘<sup>くぎ</sup>が打ってあり、全然外は見えない状態でした。隣に部屋がありましたが、それを仕切ってある襖にも釘が打ってあり、全然開けられない状態でした。そして、ドアにも二重に鍵がかけてありました。

それまで私は、信仰歴が4、5年になったとしても、わずか40日くらいで離教していく兄弟姉妹を見て、そんなに簡単に神様を裏切ることができるのだろうかと思っていました。しかし、自分がその立場に立ってみて、初めてそういう兄弟姉妹の気持ちが分かったのです。

私の場合、天井がとても低い場所に一か月間暮らしていくわけですから、靈的に力を失って、おかしくなってしまうのです。

聖書も聖歌も御言もすべて取り上げられてしまっていて、祈ろうと思えば邪魔されるのです。そして、突き飛ばされたり音をたてたりされるのです。ですから、とにかく祈らないと靈的におかしくなってしまうと思いました。その時に思い出したのが海外宣教に行っている兄弟たちのことです。

アフリカなどの難しい国に宣教に行っている兄弟姉妹は、心情が落ちれば牧会してくださる人はいないし、御言は届かない。そういう中でただ祈るしか神様につながっていく道はない。そこで闘っている兄弟姉妹のことが思い出されました。

そしてもう一つ思い出したのが、『新天地』にあった李ヨハネ先生の御言で、アブラハムとサラの信仰について書かれたものでした。

その中に、「重大なときに神様に相談しなかった」という内容が書かれてありました。エジプトの女ハガルを、神様と相談なくアブラハムの所に行かせ、そのとき生まれたのがイシマエルであり、神様は「私は知らない。サラの言うとおりにその二人を出しなさい」と言われたというのです。

その御言がとても頭に残っていて、とにかく祈って神様につながっていくしか道がないと思いました。ですから布団を被って寝ているふりをし、祈りつづけました。朝は40分、昼は21分、夜は12分、必ずそれだけは続けました。今までの信仰生活で、これほど祈ったことがないと思うほどに真剣になって祈りました。

## ◆啓示と夢によって導かれる

すると不思議なことがいろいろ起きてきました。それは祈りを始めて21日目ぐらいでした。夢を見るようになり、いろんな啓示が下りるようになりました。その中で三つほど覚えています。

それは、今から考えれば申し訳ない話ですが、もし私が靈的におかしくなって、神様と真の父母様を裏切るようになったとしたら、そのときは生きていられない、死んだほうがいいと思い、死ぬ準備までしました。かみそりを用意し、母のバッグからとても強い頭痛薬を盗み出し、それを隠し持ちながら祈りつづけたのです。

「神様、もし万が一あなたを裏切るようなことがあったならば、私はこの薬を飲み、手首を切って死にます」

そのとき、第一回目の啓示が下りました。「どうして死ぬのか、あなたは生きて信仰を全うしな

さい。文先生はメシヤであるがゆえに死ぬことができなかったのだ。「あの興南に入っておられたときも、自らの肉体を生かしていかれたではないか。だから、あなたはここから出て信仰を全うしなければいけない」と言われたのです。

そのとき、とても申し訳なく思って、「なぜ死ぬことを考えたのだろうか」と、思いとどまることができました。

2回目に降りた啓示が、「サタンはあなたを離教させることだけが目的ではない。祝福家庭の一つでも崩したいのがサタンの目的である」という内容でした。

3回目には、「私の願いをかなえて欲しい。私の願いは、神の血統をこの地上に一人でも多く残してくれることだ」というのです。それを聞いて、私は“まだまだ死ぬことができない。ここから無事に出て、神様の血統を生むまで死ねない”と思いました。

さらに、不思議なことが次々に起こりました。

お寺で監禁されていたとき、お寺の住職が「退屈だろうから」とレンタルビデオを2本借りてきてくれました。インディジョーンズの「最後の聖戦」と、スティーブ・マックイーンの「大脱走」でした。これを観て本当に力が出ました。まるで、神様からのメッセージのような気がしたのです。

脱走不可能と言われた収容所を囚人たちが抜け出していくのですから、この監禁も絶対抜け出せると思いました。「最後の聖戦」は、イエス・キリストの聖杯をめぐる、善と悪が戦うのですが、最後、善が勝利する姿を観ながら、勇気が出ました。私の選んだ道は絶対間違いないと…。

脱出してから後、私には「何故、お寺の住職はあの2本のビデオを借りてきたのだろうか」という疑問がありました。もしかしたら、「私を逃がしたい」という思いがあったのではないかとも思われました。子女が生まれて熊本へ帰省したときに、その真意を聞いてみました。ところが、住職は「自分はそんなビデオを借りていない。何かの間違いではないか」と言うのです。そのときに、これはこの人の意志でやったのではない。自分の意志ではないから、その部分だけ記憶が消されているのだと理解できました。やはり神様からのメッセージだったのです。

また、夢でも不思議なことがあり、「襖の一部が開くから隣の部屋に逃げなさい。そして窓から飛び下りて逃げていくんだ」と言われたのです。それは5月のことでした。私はすぐ起きて襖を開けようとしたのですが、とても大きな釘が打ってあるために開かないのです。ですから、なぜ霊界はこの襖が開くと言ったのか、とても不思議でした。

しかし、とにかく40日目 cameたら、私は窓を割ってでもここから立ち去ろうと決意していました。その40日目というのは6月に入ってからでしたが、5月31日の朝、もう一度啓示が降りたのです。

「きょう実行しないといけない。今まであなたが祈祷条件を積んできたことが6月になれば、また一から積み上げなければならなくなってしまう。それに、6月はいつもさまざまな問題の起こる月である。とても霊的に弱くなる月だ。だからきょう実行しなければならない」と言われたのです。そして起きて襖を見たら、なんと釘がなくなっていたのです。それを見た瞬間、神様がきょう実行しなさいと言われていることを悟ったのです。

釘が何故なくなっていたのかというと、私の気持ちがまったく変わらないのを見た親は、6月になったら村上密牧師を呼んで、隣の部屋で私を教育しようと思って、親が釘を抜き、隣の部屋の準備をしていたらしいのです。私が、釘を抜いたことに気づかないと思ったらしいのです。

ですから、私は、村上牧師の来る前に脱出したこととなります。まさに、脱出するべき時を霊

界から教えられたのだと思います。

脱出した後、親が大金を支払い、反対牧師を使って私を監禁したという事実を知り、そのことが私の心を深く傷つけました。しかし、私の場合、御旨を歩む中でその傷が消えていったのです。

いろんな責任分担を歩ませていただきましたが、一番大きかったことは、伝道対象者を御言で教育する責任を任せられて歩んだときでした。「一番、血の近い人を愛したいのに、愛することができないのならば、私から遠い人をまず愛していこう。私が担当するすべての人を天につなげていきます」と決意しました。わずか1年間でしたが、ほとんどの伝道対象者を天につなげることができました。

しかし、ある一人のゲストと重要な話をする日、主体者が私の両親と会う約束の日と重なってしまいました。主体者からは、私にもいっしょに来てほしいと言われましたが、「ゲストの永遠の命が大切だ」と思って、私は帰りませんでした。

今思えば、これが私の越えるべき最後の試練だったように思います。対象者との話が終わると同時に、主体者からも連絡が入って、私の両親が受け入れてくれたという内容でした。

そして、当時、反対牧師問題を担当する人から、監禁から脱出するためには真のお父様の写真を出された場合、それを踏んでもいいからとにかく監禁から脱出するよという指導がありました。しかし、私が監禁される前のことでしたが、監禁から脱出してきた兄弟姉妹の中には、その「踏み絵」を踏んだために傷ついている人が多くいました。それは監禁から脱出するため、本心からしたのではないにせよ、真のお父様を形式的にでも否定したことで、深く傷ついてしまう人が多かったのです。

だからこそ、私は、もしそのような状況になった場合、お父様の写真を踏まずに出てくるんだと心に決めていたのです。信仰をまげることなく、監禁から出てくることができたのは、私にとって幸運でした。もしも踏んでしまったら、きっと私の良心がゆるさなかったと思います。

## ◆命懸けの脱出

ところで、お昼の12時から30分間だけは、部屋に監視がいなくなります。また、お寺の周りには農家であり、12時から12時30分までは人がいなくなるのです。監視が御飯を食べにいったときに、私は服を着替えて隣の部屋に行って準備しました。窓は二重になっていたのですが、障子を破り、木の枠組みを全部外してサッシを開けました。

そしてもう一度祈ったのです。「神様、今私は飛び降りてここから出ていきます。もし、脱出が失敗したら、もう逃げるのが難しくなります。その時は、もしかしたら申し訳ないですが、やはり死ぬかもしれません。ですから神様導いてください」と祈って窓から飛び降りました。その下には小さな川が流れていて、ずぶ濡れになりながら走ったのです。

私の母の姉は、監禁していることが外部に漏れることをとても恐れていました。お寺ですから、そういうことが漏れてしまえば広く知れわたってしまいます。私のお寺の周りには門徒が大勢いるので、「走るだけではだめだ、近くの家へ逃げ込もう」と思って、とにかく裸足でその家へ飛び込んだのです。

そして、アベルにつながらないと導かれなれないと思い、電話を貸してもらって教会に電話しました。電話で「今出てきました」と言うと、「陽子さん、6000年の出会いだね」とこう言われたのです。そのとき本当に涙が出て止まりませんでした。

そして、「その奥さんが良い方であるならば、車に乗せてもらって近くの病院まで逃げなさい。そこからタクシーを呼んで市内まで行きなさい」と指示してくれました。

その婦人はとても良い方で、裸足の私に靴と食べ物を下さって、病院まで送ってくださいました。そこからタクシーを呼んで市内まで逃げることができました。

### ◆逆境を越えて得た親子の絆

そういうことが1990年にありましたが、今では父も母も私がずっと意思を曲げないものから、あきらめて1992年8月に結納して、11月に披露宴、そして籍を入れました。

今でもマスコミの攻撃の激しい中ですが、「親戚は理解できないかもしれない。しかし、おまえと私は親子である。最後には、親は子を信じるものだ」と言ってくれ、無事に入籍を済ませることができました。

私の監禁には、八代教会の中島牧師、鹿児島教会の布田牧師など4人の牧師が来て、一日8時間ほど説得を受けました。しかし、私がどうしても変わらないということで、6月には村上密<sup>ひそか</sup>牧師が来る予定だったのです。私はちょうどその前に抜け出すことができ、助かったのです。

一か月の間いろいろな啓示を受け、出てきたときにその月の『ファミリー』を読みました。するとそこに私が一か月間啓示を受けた内容がすべて書いてあったのです。それを見ながら、「真のお父様の御言が神様の御言である」と初めて悟らせていただきました。

これからも信仰を最後まで全うして頑張りたいと思います。

## 【相談窓口のご案内】

統一教会信者の方で、ご自身が拉致監禁に遭う危険性を感じている方、また、不幸にもすでに拉致監禁され、PTSDなどの後遺症に悩んでいる方、あるいは反対派の影響などから信仰生活や人間関係が円滑にいかなくなり、悩んでいる方々の相談窓口を設置しています。

ただし、医療面での専門スタッフがおりませんので、ご相談を受けた上で、必要に応じて専門家などの関係者と連絡し、対応させていただく形を考えております。

少しでも、当事者の心理的精神的な負担を軽減することを目的としております。お電話またはメールでお知らせください。

お電話の場合は、統一教会の代表電話から「広報局」にご連絡ください。

電話番号：03-3467-3181

メールの場合は：[rachikankin43@uc-japan.org](mailto:rachikankin43@uc-japan.org)

お電話、メールのいずれの場合も、相談者のお名前とご連絡先を明らかにして下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。